第５６回夏季県外史跡踏査　埼玉県西部（武蔵国）方面（日高市、寄居町、秩父市、小鹿野町）
―渡来朝鮮文化と秩父事件が日本に与えた影響を探る―　踏査報告

川崎市立川崎総合科学高校　　**阿部　功嗣**

はじめに

平成 29 年度(2017)夏季県外史跡踏査は下記のコースと講師陣で行った。現地でしか学ぶことができない歴史を各講師からご教授いただき大変意義深い踏査となった。本稿では引間氏を講師にお迎えした秩父事件の踏査に絞り報告したい。他については社会科部会報第 82 号を参照いただきたい。

第１日目(8/3)：橋本－高麗神社・高麗家住宅・聖天院－高麗本郷・巾着田－鉢形城公園・鉢形城歴史館－埼玉県立自然の博物館－和銅黒谷　宿泊地：和銅鉱泉ゆの宿　和どう

第２日目(8/4)：和銅遺跡－椋神社－井上伝蔵邸跡・墓－清泉寺－龍勢会館（秩父事件資料館・復元井上伝蔵邸）－石間交流学習館－小鹿野市街－音楽寺－秩父郡役所跡・矢尾商店跡－秩父神社－横浜

講師：須田勉氏（日本高麗浪漫学会会長・元国士舘大学教授）・横田稔氏（高麗神社社誌編集委員会・主任学芸員）・石塚三夫氏（鉢形城歴史館館長）・井上素子氏（埼玉県立自然の博物館主任学芸員）・引間春一氏（秩父市文化財保護審議委員）

１．秩父事件前夜の秩父

第１日目夕刻に宿泊地の和銅鉱泉へ引間氏をお迎えし、秩父事件の背景について講義を受けた。

山に囲まれた秩父には峠が百前後あり、どこへ行くにも峠を越える。婚姻関係の繋がりは平野部より群馬や長野と強かった。土地耕作率は今でも 18%、水田は１%で貧しい。それを補ったのは耕作地の 28%を占める桑園。「耕地」と呼ばれる集落的まとまりは、味噌、醤油、お金、お互いに融通し合っている隣組的共同体で、誰かが困れば払えなければ皆で助ける。秩父の言葉で心が滑らかな様を「なめっこい」というが、名主のような人はそういった責任感や人情がとても厚い人が多かった。

明治維新前後に生糸生産を通して秩父の農民が日本どころか世界経済に巻き込まれていく。しかし明治 14 年(1881)からのヨーロッパ不況の影響で 15 年に生糸価格が暴落し、農民は大打撃を受けた。さらに税制改革による現金納化や、古来非課税であった山林への課税、松方デフレ政策が困窮していた農民経済を破局させた。これが各地における自由民権運動への農民の参加や激化事件の背景。（関東近辺養蚕地帯での農民騒擾事件は明治 16～17 年内だけで約 70 件にのぼったといわれている）

大宮郷（秩父神社周辺）の経済は明治 15 年までとても潤っていて、六斎市として開かれた絹市には東京の商人が多く集まり、秩父夜祭の屋台傘鉾（国重要民俗文化財・ユネスコ無形文化遺産登録）が興隆したのもこの時期。そのような中で秩父の各地で悪質な高利貸しが横行し、官憲との癒着がみられた。明治 11 年 9 月 11 日付太政官布告による公定利息は 2 割であったが、実際に農民が 10 円の借用証文で借金をすると受け取るのは「2 分切り」で 8 円であるのに、10 ヶ月後に負債は約 27 円（3.3 倍）に膨らんだ。17 年秋までに、納税や借金返済ができず「身代限り」（破産）となる農家は 700 戸を数え、そこここの山林で縊死（首吊り）が発生し、子どもの身売りは数えきれないほどであった。

落合寅一、高岸善吉、坂本宗作ら後に困民党幹部となる面々は、明治 16 年末から 17 年春にかけて郡役所や警察署へ「高利貸説諭願」を提出し借金返済の猶予を請願した。しかし高利貸と癒着した官憲が下す裁定に農民の願いを聞き届けるものはなく、そのころ来秩した自由党左派大井憲太郎の政談演説会が契機となり、秩父の農民の中に自由党入党者が増加して行った。その後自由党員を中心に秩父事件を起こす秩父困民党が結成されることになった。

２．吉田から石間へ～秩父事件の震源地～

第２日目、宿泊地の和銅鉱泉を出発し、引間氏とバスで秩父事件の震源地・旧吉田町の椋神社へ向かった。10 月第２日曜日に行われる龍勢祭で有名なこの神社の境内に、明治 17 年 11 月 1 日夜、大宮郷の名主で侠客の田代栄助を総理とする困民党農民 3000 名が集結した。10 月 26 日に秩父各地で山林集会が開かれ決起一色となり、板垣退助が自由党を 29 日に解散したことでさらに激高した農民が 31 日に金崎の永保社を襲撃した。風布村や金崎での蜂起の知らせを聞き、上日野沢の小前で会議を開いた困民党幹部は全国の農民組織との連携をあきらめ、秩父単独での蜂起という苦渋の決断を下した。椋神社の境内には完成したばかりの学校校舎があり、その職員室で負債の返済延期を中心とした四要求と軍律五か条が明文化されたという。我々は椋神社で龍勢ロケット、明治 16 年銘の絵馬、扁額、秩父事件百周年記念碑、像や事件の解説版などを見学した。続いて会計長井上伝蔵の屋敷跡、井上家墓地で各地での潜伏を経て北海道北見にまで落ち延び、名を伊藤房次郎と偽って大正７年(1918)まで生きた井上伝蔵の生涯について聞き、貴布祢神社、椋神社集結前の戦闘現場となった吉田村連合戸長役場(現吉田小学校北側)や清泉寺の新志坂などを見学したのち石間へと向かった。

石間は冬の日照時間が２時間ほどと特に生活が厳しく、耕地の連帯感の強さは副総理加藤織平を中心にほぼ全戸が困民軍に加わったことからもうかがえる。石間交流学習館(旧石間小学校)の２階で引間氏が中心となって集めた秩父事件資料や事件の様子を描いた絵画の展示室を見学した。途中バスを降りて見学した加藤織平の墓石と引間氏の話から、事件直後の抑圧された村の生活や、アジア太平洋戦争終結まで事件関係者へ国家による差別が顕然と存在した事実に深い悲しみと憤りを感じた。

３．小鹿野から音楽寺へ～進撃する農民たち～

11 月 1 日夜、椋神社で新井周三郎を隊長とする乙隊と飯塚盛蔵を隊長とする甲隊の２隊に分かれた困民軍は吉田・小鹿野で高利貸店の焼き打ちを行った。我々は小鹿野中心街の旧道を通り車窓から高利貸中田健三郎家跡や打ち壊しに合わなかった常盤屋の白壁・格子戸建物を見学し、２日朝まで野営地となった小鹿神社(旧諏訪神社)の大鳥居を遠目に見て、困民軍と同じく小鹿坂峠を越え大宮郷進軍の拠点となった音楽寺へ向かった。「旧石器ねつ造事件」の現場となった小鹿坂遺跡がある尾田蒔丘陵の東側に秩父 23 番札所の音楽寺はある。山の松枝が風で立てる奇妙な音に由来するといわれる寺名から音楽関係者の参詣が多く、掲示板には歌手や関係者のポスターや名刺が並ぶ。境内に昭和 53 年に建てられた「秩父困民党無名戦士の墓」碑には「われら秩父困民党　暴徒と呼ばれ暴動といわれることを拒否しない」と刻まれているが、事件に苦しんだ秩父の歴史を思えばこの文句は適さないのではないか、との思いが参加者の間に広がった。今は荒川に掛かるハープ橋や武甲山の雄姿が樹間から垣間見られるくらいだが、当時斜面は茶畑などで高い木がなく大宮郷はじめ盆地が見渡せた。斥候の知らせを受けた困民軍は寺鐘を打ち鳴らして斜面を駆け下り、荒川を渡って大宮郷へと入った。

４．秩父大宮郷～困民軍による革命と崩壊～

困民軍の渡河地点に近い佐久良橋を渡り、大宮郷の広がる低位段丘に上った。西武秩父駅方面に進むと秩父地方庁舎が郡役所跡地、ＮＴＴビルが警察署跡、その手前の矢尾デパートが矢尾商店の後身で、事件当時の当主矢尾利兵衛が記した『秩父暴動概略』(矢尾商店日記)には、高利貸や官憲の不正

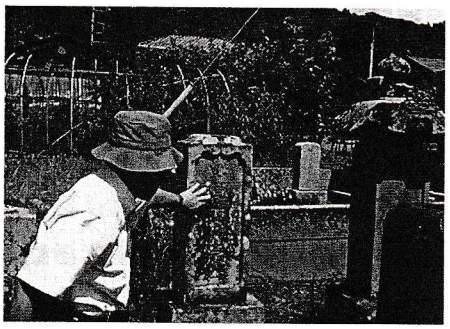
や、「人民」のための世直しを目的とした困民軍の規律よい行動が生々しく記されている。我々は車窓から困民軍が２日より本部を置いたこれらの地を見学し、秩父神社へと向かった。秩父夜祭があまりにも有名な秩父神社には２日夜までに各地から農民が終結しその数は１万人に上ったという。境内にあった大宮学校を野営地とし、３日～４日にかけ各地で警察や鎮台兵との戦闘が繰り広げられた。我々は左甚五郎作と伝わる社殿の彫刻群や田代栄助の父が寄進した石灯籠、困民軍が本陣を放棄した５日以降に自警団を組織した剣豪高野佐三郎の碑などを見学し帰途に就いた。

帰りの車中、引間氏が地元の教育者として働きながらも一つひとつ骨を折り調べ上げてきた事件の歴史的事実について聞きながら、「権力は腐敗する」「地方史にこそ真の歴史がある」とおっしゃられた言葉が心にしみた。事件後に逮捕され３カ月という短い勾留と裁判後に処刑された田代栄助の墓は下影森地区金仙寺にある。その遺体は親族の元に帰されず、拘置所や警察学校で物のように扱われ今は行方不明であるという。教壇に立つ身として地方史の教材化に尽力されてきた歴史家の方々の努力に感謝しつつ、史跡を一つ一つ訪ねて聞く活動の大切さを再認識し本年の踏査も無事に終了した。

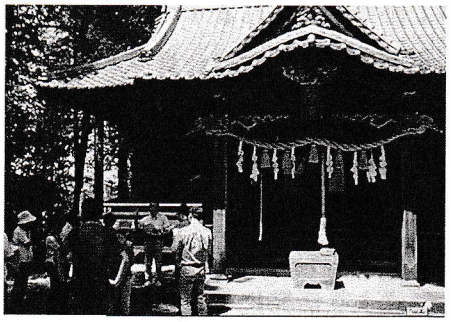
《参考文献》

井上幸治　1968　『秩父事件』中公新書

色川大吉　1970　『明治の文化』岩波書店

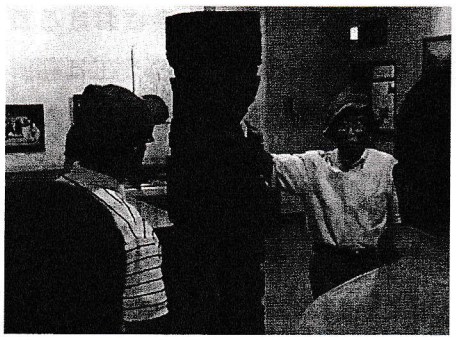


井上伝蔵墓地

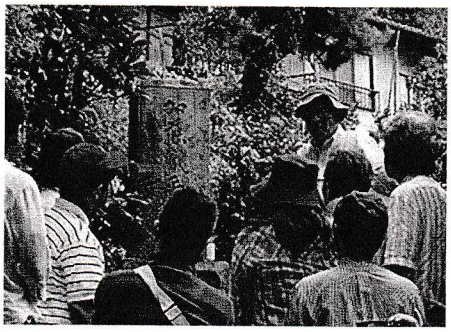


椋神社境内

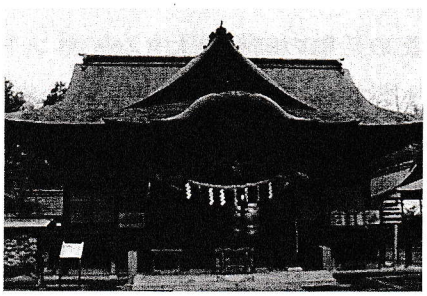
音楽寺石碑



傷跡が残る高利貸店の柱



石間地区　加藤織平墓地



秩父神社社殿